



びわ湖の水を大切に



私たちは毎日、様々な場面で水を使っていて、蛇口をひねればいつでもきれいな水が出てきます。しかし、水は決して無限にあるわけではありません。限りある貴重な資源のひとつであることを忘れないようにしましょう。

■1450万人を支える水 (9-1 水利用)

もっと詳しく知りたい方は、「琵琶湖ハンドブック」をチェック！

びわ湖は周囲を山に囲まれており、降った雨のほとんどがびわ湖に流れ込みます。滋賀県に住む人たちは、川やびわ湖の水を生活や工場、農業用水として使っています。

そして、びわ湖にたくわえられた水は瀬田川や宇治川、淀川として下流の京都や大阪を流れ、約1450万人の生活を支えています。

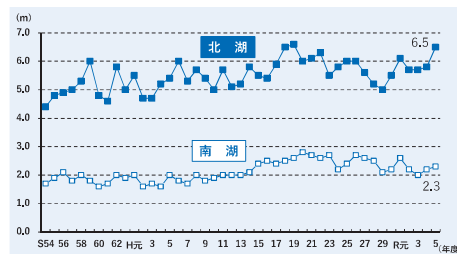


びわ湖の水利用区域図

■びわ湖の水質 (8-4 水質)

右の図は、水がどのくらい透き通っているかを示す透明度のグラフです。透明度は長期的には良くなっており、水質は改善しているといえます。

しかし、透明であるばかりが湖にとって良い環境とは限りません。「透明だから良い」「にごっているから悪い」と考えるのではなく、いろいろな視点から環境を考え、みんなが共存できる道を探ることが大切です。



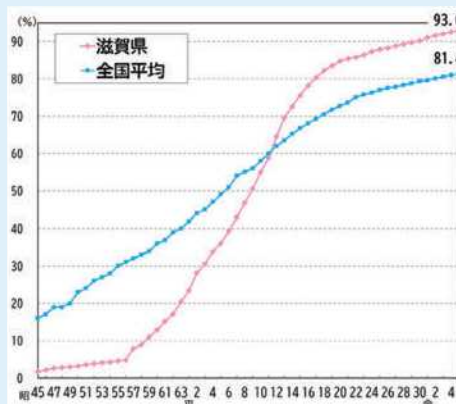
びわ湖の水質 (透明度)

▶下水道のはたらき (9-3 下水道)

よごれた水を処理する下水道は、びわ湖の水のよごれを防ぐために大切な役目を果たしています。

滋賀県では、下水道が広くいきわたるように、計画的に整備を進めてきました。その結果、下水道普及率は93% (2023年) で、汚水処理人口普及率は99.2%で全国2位となっています。

しかし、下水道には何でも流していいわけではありません。みんなの家庭からでる時点で、水をよごさないようにするために何ができるか考えてみましょう。



下水道の普及率



びわ湖の魚と漁業



びわ湖にはたくさんの魚がいて、昔から人々は漁業を営み、その恵みを受けてきました。しかし近年、びわ湖の漁獲量は大きく減少しています。生息場所を守って、魚介類を増やし、湖魚をたくさん買って、食べて、びわ湖の漁業を応援しましょう。

■固有種 (7-3 固有種)

限られた地域にしかすんでいない生き物を「固有種」といいます。びわ湖は、日本で特に固有種が多くすむ湖で、その数はなんと66種。そのうち魚の固有種は17種います。



ビワコオオナマス

■外来種 (7-12 外来種)

滋賀県では、オオクチバス (ブラックバス) やブルーギルなどの外来魚を駆除する取組を進めています。

これは、外来魚などを食べることによる被害が深刻で、生態系のバランスを崩しているからです。



オオクチバス

胃袋の中の小魚、エビ

■湖魚料理 (2-2 食材、2章トピック 琵琶湖八珍)

びわ湖で獲れる魚介類は、煮つけ、酢のもの、焼きもの、みそ汁、刺身、なれずしなど、いろいろな方法で食べられています。ビワマス、アユ、ニゴロブナ、ホンモロコ、セタジミなどが有名です。



ビワマスの刺身



ニゴロブナのふなずし



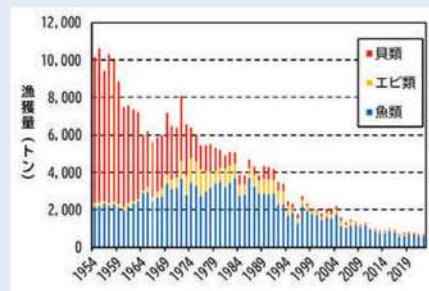
ホンモロコの素焼き



セタジミの味噌汁

▶漁獲量を増やすために (4-8 漁業)

びわ湖の漁獲量は、魚の種類によっては増加の兆しがみられるものの、全体としては減少傾向にあります。びわ湖の魚を増やすためには、魚が産卵し、成長する場所の回復が必要不可欠です。また、びわ湖の魚をたくさん買って食べ、びわ湖の漁業を応援することでも、びわ湖の魚を増やす取組の活性化につながります。



びわ湖の漁獲量